

大学教育における「クリティカルシンキング」

久保田祐歌

(愛知教育大学 大学教育研究センター)

「クリティカルシンキング（批判的思考）」は、大学において育成が必要な能力の一つとして、昨今の注目を集めている。例えば、平成24年の中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』においては、「知識や技能を活用して複雑な事柄を問題として理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力をはじめとする認知的能力」が、「学士力」の重要な要素として示されている。

従来、大学において「批判的、合理的な思考力」は、各学問領域の教育のなかで暗黙的に行われており、とくに心理、看護、経営、哲学などの分野では、「クリティカルシンキング」育成を明示する形で教育が行われてきた。しかしながら、近年の高等改革においては、教員が「何を教えたか」から、学生が「何をできるようになったか」への教授学習観の転換を前提として、学士課程を通して目標とする能力の明確化と育成およびその評価が大学に要請されている。学生が専攻する特定の学問領域の授業に限定されない、汎用的技能としての「クリティカルシンキング」の育成と評価が高等教育の課題となりつつあるのは、こうした学修成果重視の文脈においてである。

学士課程を通してクリティカルシンキングを育成するという教育目標が、一つひとつの授業において成立するためには、その定義や意義が大学間で一定程度共有されている必要がある。例えば、米国では1980年代後半から、アメリカ哲学会主導により、関連する分野の専門家によるデルファイ調査に基づき、クリティカルシンキングの定義に関するコンセンサスが作られている（Facione,1990）。2000年以降の取組としては、全米大学協会が、2014年までに作成した16のルーブリック（評価観点と評価基準を配置した表）のうち「クリティカルシンキング」も含まれ、各大学がクリティカルシンキングを教育目標として授業を行い、その成果を評価する際の指標を作成するためのモデルとして参照できるようになっている（AAC&U）。その他、1988年に『*Inquiry: Critical Thinking Across the Disciplines*』が創刊されているなど、多様な学問領域間でクリティカルシンキングの理論と教育実践について議論するための土壌がある。日本においても、学士課程教育の学修成果の一つとして、汎用的なクリティカルシンキングの能力を育成するための教育方法や評価に関する学問領域横断的な議論が始まりつつある（楠見ほか,2011）。また、特定の領域を題材としてクリティカルシンキングを育成するためのテキスト開発もなされている（伊勢田ほか,2013）。

これまでクリティカルシンキングを明示的な教育目標としていなかった授業で、学問領

域の内容を教授しながら、クリティカルシンキング育成を目標の一つとする際の検討事項としては、以下が挙げられる。まず、クリティカルシンキングの要素のどの部分に焦点をあてた授業を行うのかを決める必要がある（能力育成か、態度の涵養か、それともその両方か）。能力育成（および態度の涵養）を目標に据えるのならば、どのような能力要素をどの程度学生が身につけるべきかを定めることになる。例えば、レポート等において論証文を書く限りにおいて有用な推論規則や議論の構造のみを学生に教えるという設定の仕方もある（Hatcher,1999）。能力育成においては、哲学を専門としない学生が非形式論理学を（どの程度まで）修得することが汎用的なクリティカルシンキング能力の発揮のための基盤形成に有効なのかという論点がありうる。

以上の詳細について、米国の Association for Informal Logic & Critical Thinking の取組や、初年次教育においても思考力の育成が重視されつつある日本の現状を示しながら報告を行う予定である。

<参考文献>

Hatcher, D.L. “Why critical thinking should be combined with written composition ” ,  
*Informal Logic* 19 : 2 , 1999

伊勢田哲治・戸田山和久・調麻佐志・村上祐子（編）『科学技術をよく考えるークリティカルシンキング練習帳』名古屋大学出版会、2013

楠見孝・子安増生・道田泰司（編）『批判的思考力を育むー学士力と社会人基礎力の基盤形成』有斐閣、2011